

よい市民、よい隣人であれ

——『軍人もまた救われるか』を読む

高村 敏浩

一 はじめに

一五二六年、マルティン・ルターは、職業軍人である貴族アツサ・フォン・クラムの要望に答えるかたちで、『軍人もまた救われるか』という文書を記した。キリストに従う者でありながら軍人であることは可能なのかという問題を抱え、良心の呵責をおぼえるクラムに対してルターは、肯定的な応答を以て答えている。しかし、それは純粹に軍人や兵士という職業が称えられるものであるというよりは、社会に秩序をもたらし、また保持するために必要な職務であるというところに根拠が置かれている。軍人は、社会において与えられた職務を忠実に遂行することによって、社会に対してはよい市民として、隣人に対してはよい隣人として生きることができるとい

うことであろう。ルターは、文書の題名となっている『軍人もまた救われるか』という問いを人間に属する義に關する問題として捉え、それぞれが社会において与えられている身分に応じて、よい市民、よい隣人であれというキリスト者の倫理として理解していたのである。

ロシアがウクライナに侵攻して数ヵ月が経つが、この戦争が私たちの生活、また現代社会に与える影響はいくつもあるだろう。その中には、すでにかたちをとっているものもあれば、これからそうなるものもある。今回行う牧師のためのルターセミナーは、ウクライナーロシア戦争の文脈の中で戦争について一緒に考える（神学する）ことをその目的に据えている。私たちはルーテル教会の教師として、ルターの著作を読み、ルターと対話する必要がある。私はこのエッセイでルターの著作『軍人もまた救われるか』を紹介するが、これは現在私たちが葛藤する問題への答えを与えるものではなく、すでに述べたように共に神学するための一助となることを意図したものであることをご了承ください。また、そのため、このエッセイの最後には、私自身が考える問題についても短く触れたい。

二 『軍人もまた救われるか』

ここでは、『軍人もまた救われるか』がどのような経緯で書かれるに至ったかと、この文書の内容を簡単に見て行く。

1 執筆背景

一五二五年七月、ルターはヴィッテンベルクでアッサ・フォン・クラムと会った。フォン・クラムは、ルターの領主であるザクセン選帝侯ヨハンの陣営に属するドイツ貴族で、職業軍人であった。フォン・クラムは、同年五月十五日、農民戦争の一連の戦争のうち最後の諸戦争の一つであったフランケンハウゼンの戦いに参加していた。⁽¹⁾ ルターによれば、ヴィッテンベルクで話をした際、フォン・クラムはキリスト者でありながら人を殺すことを生業としていることに良心の呵責をおぼえ、同じような葛藤を持つ仲間たちと共にルターにこの問題を取り上げて文書を書くようにとの要望をした。求めを承諾したものの、ルターが実際に執筆を終え、その印刷の準備が整ったのは、翌一五二六年一月にフォン・クラムからの催促を受けたさらに半年以上後の十月であり、実際にヴィッテンベルクで出版されたのは一五二七年一月五日のことであった。⁽²⁾

ルターは、フォン・クラムの要望に応えて、次のように言って『軍人もまた救われるか』をはじめた。

このまえ選帝侯がヴィッテンベルクへおいでになったとき、あなたは私たちと軍人の身分について話し合われ、その話の中で、いろいろなこと、たとえば良心に関する問題が持ち出された際に、あなたやほかの多くのかたがたは、これについて私の教えを文書で公にするようにと要望された。それは、この身分、この制度に関して悩んでいる人がたくさんいて、ある人々は疑いをもっているし、ある人々は全く向う見ずにも、神

を問題にするのをやめてしまい、魂も良心も無視しているからであった。……それはまるで、戦争というところが非常に特別なことであって、戦争が起これば、神も魂も考えることができない、とでも言うかのようなあった。けれども、死の切迫と危険の際にこそ、神のことを、また魂のために、もつとも多く考えることが必要である。そこでそれに対して、私にできるかぎり、弱い、くらんだ、疑っている良心を勧告し、不信仰な人々にもつとよい教えを与えようと、私はあなたのご要望を受け入れてこの書を書くことを承諾した。というのは、よい正しい良心をもつて戦う者は、よく戦うことができるからである。すなわち、よい良心のあるところには、大きな勇気と大胆な心が必ずある。⁽³⁾

ルターがこの問題を良心、特に救いについての不安として捉えているようであることは注目に値する。補足ではあるが、この文書が執筆された当時、ヨーロッパへのトルコの脅威が薄れていたことが、文書の最後に書かれたルター自身の言葉から分かる。⁽⁴⁾

2 内容——構成

『軍人もまた救われるか』は、次のような構成となっている。

A 挨拶文（導入）

B 第一部―「職務と人、仕事と行為者の区別」

1 二つの義のうちの、救いと関係のない方の義の問題として

C 第二部―人物とこの身分の使用

1 戦争と三種の人たち

i 下位の者から上位の者への戦争

ii 同等の者たちの戦争

iii 上位の者から下位の者への戦争

2 戦争に従事する人たちについて

i 貴族と職業軍人

ii 不正の戦争を行う主人に従うべきか

iii 複数の主人を持つことについて

iv この世の名誉のために戦うことについて

v 職業軍人と迷信について

D 終わりの挨拶、トルコ人との戦争についての言及

文書の構成から、ルターがこの問題に対してどのような視座から取り組んでいるかが、おぼろげながら見えてくる。ルターは、軍人の救いと戦争について、社会とその秩序の問題として理解しているのである。また、ルター

は社会における身分としての軍人についてだけでなく、戦争そのものについても考察を行い、意見を述べているが、これらはすべて、ルターが生きていた、当時の社会——封建領主の支配という文脈としての社会——における秩序から、答えが与えられている。それでは、ルターは社会通念、いわゆる一般常識だけを土台として、この問題に答えていたということになるだろうか。そうではなく、ルターは聖書に根拠を置く。しかしルターはそれを、新約聖書が標榜すると当時のある人々に理解されていた倫理を斥け、実際に営みの行われている社会を、そこに問題があることを認めつつも肯定するものとして、もっぱら行っているのである。

3 内容——要約

ルターは、『軍人もまた救われるか』において、1533年に書いた『この世の權威について』に繰り返し言及する。ルターが最初に問う職務と身分については、事実、その要約によって答えられている。

要約は次のとおりである。剣の職務はそれ自身では正しいものであり、神的に有用な制度である。神はそれが軽視されないで、恐れられ、重んじられ、従われることをお望みになる。……神は、二種類の統治を人間の上に設けられた。一つは剣によらないで、言による霊的なものであり、これによって人は信仰を得て義なる者となり、その義とともに、とこしえの命を得るのである。このような義を、神は説教者たちにお命じになった言によって保たれるのである。もう一つの統治は、剣による現世の統治で、言によって信仰を得て義

となり、とこしえの命に至ろうと望まない人も、現世に対しては温順で正しいものであるように、この現世の統治によって強制されるためなのである。このような正しさを、神は剣によって保たれるのである。そして神はこの正しさに対して、とこしえの命をもって報いようとはされないが、人々の間に平和が維持されるために、その正しさを求めたまい、それを現世の財宝で報いたもう。神が主権者に多くの財宝や名誉や権力をお与えになるのは、主権者がそれらのものを他人に対して正当に所有し、このような現世の正しさを守ることによって、神に奉仕するためである。だから、神ご自身がこの霊的かつ身体的な二つの義の設定者であり、師であり、促進者、報償者でありたもう。この中には、人間の定めや力は何もなく、純粋な神の事⁽⁵⁾だけがあるのである。

ルターは、このように社会制度に根差した職務と身分を、たとえば必要悪だというような消極的ではなく、むしろ積極的に肯定する。この背景には、ルターが引用する複数の新約聖書の箇所があるが、特に繰り返し言及するのは、ルカによる福音書三章で、洗礼者ヨハネが自分のところへ来た兵士たちへとった態度と、「自分の給与で満足していないさい、人をおどかしたり、だまし取ったりしてはいけない」という答⁽⁶⁾である。またルターは、戦争を行った旧約聖書の人物たちにも言及する。また、この文脈の中で、ペトロとパウロがキリスト者たちに「人間の制度と現世の主権の命令とに従順であるようにと」命じていることを確認⁽⁷⁾している。

職務と身分について肯定的であつても、それはルターが、実際の運用の問題を無視しているということではない。事実ルターは、法令を厳格に適用するだけでは裁けない事例があることを認め、運用における例外の必要性

や、法令を「衡平」によって支配する重要性を説いている。⁽⁸⁾ ここでもまた、ルターは旧約聖書を引用し議論を展開する。ルターにとって、旧約聖書の人物たちは信仰を生きるにあたってのモデルを提供することが、ここから分かる。これは、ルターが一方で、旧約聖書の主要な目的をイエス・キリストの約束をその影として指し示すものとして理解しつつ、同時に、もう一方では、イスラエル人たちを「信仰深いシナゴーグ」として、神の約束に信頼して生きた信仰の先人と理解していたからである。⁽⁹⁾

ルターは社会的に下位の身分の者が上位の身分の者に対して戦うことについて取り上げる中で、狂人と暴君との区別をつける。ルターは狂人を、理性を失っている状態にある者と定義し、これを主人として退けることを認める。しかし、暴君は不正を行う時にそれを不正と認識して行っているため、理性の喪失とは異なるとして——つまり暴君は、理性があるため未だ悔い改めてよくなる可能性を残しているとして——これを退けることを認めないのである。⁽¹⁰⁾ しかし同時に、貴族や領主、王や皇帝を含め、すべての人はその上位者に対して下位であり、上位者の支配への従順という義務があることを強調する。これによってルターは、たとえ皇帝であっても神に対しては下位者であること、そして神から委託された社会における責任を問われることを明確にするのである。⁽¹¹⁾ また、逆に上位者が下位者に対して戦争を行うことについては肯定する。なぜなら、上位者はつねに、下位者よりも大きな公共の代表者であるためであり、上位者は下位者を、秩序を以て統治する責任があるからである。⁽¹²⁾

ルターは、同等の者同士の戦いの可能性を取り上げる中で、自分の正義の戦争についての理解を明らかにする。剣の果たすべき役割については、「悪人を罰し平和を維持すること」として繰り返し定義するが、正義とみなされる戦争もこれに従う。⁽¹³⁾ さらに、戦争に強いられて関わらせられるということもまた、重要な点である。ル

ターは、「したいこと」と「なすべきこと」があることに触れ、王や領主などにとって戦争は好んですることではなく、仕方なく、それも自分のためではなく、他者のためにせざる得ないものであるべきだとするのである。¹⁴⁾

軍人として実際に戦争に参加するにあたって、それが正しい戦争ではないときに上位者への従順との関わりの中でどうすべきかという問いについても、ルターは触れている。ルターは、それが不正な戦争であるとはっきりしている場合については、良心を神に従わせ、戦わず、また主君に仕えてはならないこと、またそのための不利益を甘んじて受けることを主張する。しかし、もし戦争の正当性がはつきりせず、主君が不正に戦争を行っているかどうか少しでも不確かであるなら、主君から最善を期待し、主君に仕えるべきであることを説く。¹⁵⁾

三 考えたこと

ルターが『軍人もまた救われるか』において主張するのは、社会における秩序と、秩序に根差した職務、そして市民として責任をもってそこに参与するということだと言えるだろう。このテーゼ自体は、私たちに多くの示唆を与える。同時にしかし、建設的な神学のためにルターを対話相手としようとすれば、ルターと私たちの文脈の違いについても触れる必要がある。

ルターの文脈、もしくは前提としてしていることは、まず、一神教の世界観である。それは、被造物とは絶対的に異なる造物主である神がいるという世界の理解である。これに加えて、それは近代性 (Modernity) の価値観で

ある。簡単に言えば、人類には一つの真理、一つの価値観が存在するという理解である。

これに対して、今日私たちは、ポストモダンの価値観を前提としている。それはつまり、人々や各共同体それぞれに真理や価値観があるという理解である。言い換えれば、真理や価値観は一つではなく、むしろ複数であるということである。また、ルターの一神教の世界観に対しては、私たち——特に日本に生きる私たち——は多神教の世界観であり、それは創造主と被造物の絶対的な断絶ではなく、むしろ存在論的な連続性だと言えるかもしれない。結果として私たちは、それぞれの共同体が主張する異なる価値観、異なる真理の間でどう整合性をとることができるか、もしくは、対話する・させることができるかを問うこととなる。

今回のウクライナーロシア戦争においても、それぞれが積極的に異なる主張を展開している。そこではそれぞれに戦争の正当性を主張しているが、それでは、それらを正義の戦争と判断することができるのだろうか。かつて、アメリカのルター派神学者ジョージ・フォレル (George Forell) から倫理の授業を受講した際に、彼が正しい戦争 (a just war) は存在せず、正当化された戦争 (a justified war) しかないのだと言っていたことを思い出す。そうすると、ポストモダンの視座の中では、客観的な正しさは不可能だということになるだろうか。他者を排斥する一つの真理、一つの価値観の主張は、今日的にそぐわないとしても、他者との関わりが不可避であれば、参与する複数の共同体における共通の真理と価値観を求め、確立していくことは必要であろう。実際、最近国際政治学者などによって思い起こさせられているのは、国連の理念に代表される国際的な合意の必要性である。今日、公共の神学について耳にする機会が少しずつ増えているように感じるが、私たちはキリスト者として、社会に参与する一市民として、公共の神学を展開していくことが求められているのではないだろうか。

今回取り上げた文書『軍人もまた救われるか』を含め、ルターの倫理の根底にあるのは、隣人と、そのよい隣人として生きることであろう。キリスト教の倫理は決して、世界から離れて正しく生きようということではない。つまり、ルターの全信徒祭司性——教職主義に対抗する信徒主義ではなく、キリスト者にはキリストの祭司性という唯一の、共同の祭司性しか存在せず、牧師も信徒もこの祭司性につながっているという理解——に示されているように、エリート主義の否定である。ルターが主張するのは、そうではなく、私たちがこの世界にあって、まことの意味で生きることである。それは、私たちがどのようにに市民として、また隣人の隣人として生きることができるのかという葛藤の必要性である。

ルターと私たちの文脈には、もう一つ違いがある。すでに触れたように、ルターは中世後期の封建社会に生きた。それに対して、私たちは現代の民主主義社会に生きている。ルターは、たとえば『この世の権威について』などで、封建社会における被統治者としての市民の服従を説いているが、同時に、統治者である貴族に対しては、市民のために社会を整える責任を説き、その実行を求める。民主主義において貴族とは誰であろうか。それは、社会制度という秩序の中で参政権を持ち、社会をよりよいものとして構築し、保持する責任を担う市民一人ひとりであろう。このように理解するとき、信仰を人間の内面だけに関係する心の問題として、宗教者が政治に関わることを批判すること、つまり、宗教と社会、信仰と政治はまったくの別物であるという生き方は、私たちの選択肢からなくなるはずである。当然ながら、どのようにに関わるべきかという問題は問われるべきであるが、牧師もまた、キリスト教の信仰を生きる一市民として隣人への隣人としての責任を果たすことが求められるのである。

四 終わりに

キリスト教会の牧師として、私たちは問題に直面する時、祈りをもって聖書を開く。しかし聖書は、現代を生きた人間のために書かれたマニュアルではないため、そこには解釈が必要となる。これは、一見すると直接、また明確な答えを与えているように思える事柄に対してもそうである。なぜなら、聖書と現代を生きた私たちの間には、数千年の時間と、異なる文化を生きているという現実が存在するからである。解釈を行うにあたっては、様々な助けが考えられるであろう。私たちルーテル教会に属する者には、ルターとヴィッテンベルクのルターの同僚たちが与えられている。彼らが聖書とどう向き合い、その時代、その状況の中で聖書をどう解釈し、そしてどのように信仰を生きたのかを知ることが、私たちにとって財産である。私たちは、ルターの著作を通して、神学の対話相手としてのルターに出会うことができるのである。聖書が解釈を求めるように、ルターもまた解釈を求めるため、ルターの言葉をそのまま私たちの問題への答えとすることはできないだろう。しかし、ルターがどう問題を捉え、みことばと葛藤し、そして答えを出したのかを知ることができれば、それは私たちが牧師としての職務をまっとうする上で大きな助けとなる。このエッセイが、そのヒントのようなものとなればうれしい。

注

- (1) John D. Roth, trans. and intro., "Whether Soldiers, Too, Can be Saved, 1526," *The Annotated Luther, Volume 5: Christian Life in the World*, ed. by Hans J. Hillerbrand, Minneapolis: Fortress Press, 2017, p. 183.
- (2) Roth, 183.
- (3) マルティン・ルター「軍人もまた救われるか」、神崎大六郎・徳善義和訳、『ルター著作集』第一集第7巻、聖文舎、一九六六年、五五一一―五五二頁。この論考の意図が、日本福音ルーテル教会および日本ルーテル教団の教職者にルターの著作を紹介し、共に神学することにあるため、ワイマール版における頁は省略し、原則として、ルター著作集の頁への言及のみとする。
- (4) ルター『軍人もまた…』、六〇四頁。
- (5) 同上、五五九―五六〇頁。
- (6) 同上、五五七頁。
- (7) 同上、五五八頁。
- (8) 同上、五六二頁。
- (9) James Samuel Preus, *From Shadow to Promise: Old Testament Interpretation from Augustine to the Young Luther*, Harvard University Press, 1969, p. 217.
- (10) ルター『軍人もまた…』、五六六―五六七頁。
- (11) 同上、五七八―七九頁。
- (12) 同上、五九〇―九二頁。
- (13) 同上、五五八―五九頁。

(14) 同上、五八二―五八六頁。

(15) 同上、五九六―五九七頁。